

## Gillian Beer : “What’s Not in *Middlemarch*” に関する一考察

惣谷 美智子

ジリアン・ビア (Gillian Beer) の論文「『ミドルマーチ』にないモノ」 (“What’s Not in *Middlemarch*”) が掲載された論集『21世紀の「ミドルマーチ」』 (*Middlemarch in The Twenty-First Century*) の序は、編者カレン・チェイス (Karen Chase) による以下のような刺激的な一文からはじまる。

“What better justifies a collection of new essays on an old classic than an acknowledgment of interpretive evanescence?” (3)

古典に関する新しい研究からなる論文集を正当化するには、自ら「解釈の消滅」を承認し、いつそ白状することが最善であろう——チェイスのこの主張は、書名のタイトルが標榜するような「21世紀的」読みを思わせ、衝撃的である。そしてそれは同時に瞠目を集めるものともなる。

... it will be clear to every reader that the authors are enjoying themselves. The readings are never flippanant, but they are nor reverent either. Irreverence is something this novel sorely needs after more than a century of worship. Reading *Middlemarch* for pleasure is not irreconcilable with reading it earnestly, and criticism can be more vivid when it reads with and against the grain that George Eliot has etched. (9)

ここでまず吟味されるのは、ジョージ・エリオット (George Eliot) の『ミドルマーチ』 (*Middlemarch*, 1871-72) を快楽のために読むことの是非である。チェイスは、この論集で各著者が自ら楽しんで読んでいることをみてとるのだが、批判はしない。むしろ彼女は彼らの読みは決して不真面目でもないが、また恭 (うやうや) しくもないのであって、『ミドルマーチ』を楽しんで読むことは、熱心に生真面目に読むこととは矛盾しないと主張している。そしてジョージ・エリオット (George Eliot) が自作の『ミドルマーチ』に一つ一つ丹念に植えつけた「種」を、共感、反感のいずれをもって読もうとも、批評はむしろいっそう生き生きしたものになり得るだろうと結論づける。チェイスのこうした主張の背景には、彼女の信念、覚悟にも似たものが感じられる。「一世紀以上にわたり崇められ続けてきたこの小説」になにか唯一足りないものがあるとすれば、「不遜」こそ、それであるという信念である。

こうした編集方針の下、執筆者の一人であるビアはいかに「不真面目」でもなく、また「恭しく」もなく『ミドルマーチ』を読み、それについて書いたのだろうか。本論では、『ミドルマーチ』について論じるビアの「読みの快楽」の一端を探っていくが、ビアのこの論文「『ミドルマーチ』にないモノ」は、読みものとしても興味深い。まず興味を惹くのは、この論文のタイトルがまさしく示しているように、テーマが『ミドルマーチ』に存在するものではなく、むしろ逆にそこでは顕在化していなかった「モノ・コト」についてであり、端的にいえば、それらの<不在>自体がテーマになっていることである。

ビアによれば、この論文の目的は、出版当時の読者 (the first readers) と現代の読者間の『ミドルマーチ』受容の落差、つまり両者間の読み取りのギャップを埋めようというものである。ヴィクトリア

朝の読者とわれわれ 21 世紀の読者とでは、150 年余りにもわたる時間が介在しており、当然ながら、その間、周囲を取り巻く森羅万象は変化し、状況は大いに変容してきている。そこでピアは現代を生きるわれわれに、当時の読者がおかれていた時代的、社会的背景の生の情報を開示し、情報を均等化することによって、読みにおける両時代の間に厳然として横たわる空白を解消しようと試みる。

だが方法に関していえば、ピアは一方では空白を埋めようとしながらも、奇妙なことに、他方ではむしろ逆のこと、つまり新たな空白を産出しているようにも読み取れる。ここではピアのそうした手法を飛び石的に概観しながら、彼女の主張の核心に迫っていきたい。

## ジリアン・ピアの方法論

ヴィクトリア朝の人間であるばかりではなく、同時にこの作品の読み手でもある者たちの当時の状況、日々の営為を生る形で、現代人が知る——しかし、それはいかにして可能なのだろうか。ピアはその解を当時の広告文に求めている。

『ミドルマーチ』の初版の形式は 8 巻からなる分冊（1871 年 12 月～1872 年 12 月）であり、第 1～6 巻は 1871 年 12 月～1872 年 10 月の間、隔月で発行され、そして最後となる第 7、8 巻はそれぞれ 1872 年 11 月と 12 月に発行されたのだが、各巻には広告がついてまわった。そこでピアが目にしたのが、これら各巻の物語に挟み込まれた広告文である。前述したように「不在」を探るという、ピアの論考のテーマもさることながら、その方法自体もまたユニークで斬新、意表を突くものとなる。エリオットの文学作品に介在することになる通常言語（非・文学言語）の広告文のテキストは、なるほどピア自身のいうように、つかのまに流れ去る、はかない、文字通り「擬似テキスト（fleeting para-text）」（16）であるかもしれないのだが、しかし擬似テキストでしかないわけではない。それは当時の読者の意識の底に蠢いている欲望、欠乏感といってもよいようなものを、まさにその瞬間、瞬間に実像として映し出し、垣間見させてくれるものとなるのである。

手縫いから機械化されたばかりのミシン、消化剤、薄毛治療薬、織物、染めもの、蠟燭、薬、ホテル、チョコレート——広告文に現れた、そうしたさまざまなものの中に当時の読者はいる<sup>(1)</sup>。『ミドルマーチ』は「当時の読み手であるブルジョワの生活を取り巻く品々、モノ的状况の中に埋まっている」（33-34）というピアの主張は、まさしくそうしたモノに対する彼女の読み取り（読み解き）によって現代に息づき、説得性を確保する。それはどのようなものになるのか、まず以下にピアの読み取りの主な例を挙げながら検証していこう。

たとえば「ミシン」に関していえば、この機械の発明は 1840 年代後半だが、それが大量生産されはじめるのは 1860 年代から 1870 年代後半にいたってからのことである。とすれば、この広告文は、当然ながら『ミドルマーチ』の時代設定（1830 年）とは矛盾することになる。だが、そうした物語設定上の 1832 年と出版の 1871 年との時代差は、当時の読者にとっては、「不在」とは映らなかっただろうとピアは推測している。ピアによれば、この間の時代性は、見えない形ではあれ、『ミドルマーチ』の骨格をなしており、またしばしばアイロニーで仄めかされもしているからである。そしてなによりも、作者エリオットと当時の読者の大半は同時代を分け合っているという強みがあったというのがその理由である。そして当時の読者の社会的風土という観点からすれば、広告文はわれわれ現代の読者にとって、機械化、大量生産化が加速していく時代を色濃く反映した貴重な情報になるのである（18、24）。

また毎回、各巻の最初頁と最後頁にはそれぞれ「宝石」、「フランス製チョコレート」の広告文が差し挟まれており、そうしたいかにもブルジョワ的な贅沢品は明らかにエリオットの作品テキストとの間に齟齬、矛盾を起こすはずである。しかし、二つのテキスト間の一種のズレ、空白は、当時の読者にと

って矛盾というよりは、ごく一般的な装飾品、付きものとしてみなされていただろうとピアは憶測する(18)。それほど彼らはブルジョワ社会に馴染んだ存在であったのだ。

エリオットと同時代人の読者の日常にとっては、おそらく当然のこととして見過ごされてきた広告文ではあろうが、それはピアの読み取りを介在させることによって、当時の読者が取り囲まれていた状況を伝える情報の宝庫と化す。現代のわれわれにとって、彼らの時代感覚はいわば肌で感じられ、いくぶん共有可能なものになる。時を経て一見、古めかしく思える広告テキストは、その文体も含めて現代の『ミドルマーチ』の理解にとっては、むしろ新しい認識を吹き込んでくれるものとなるのである。

だが、読みにおける「新しい認識」という観点からすればどうだろうか。ピアの議論がさらに活気を呈し精彩を放つのは、たとえば彼女が以下のような広告文を切り取った場合である。そこには、単に作品の時代性を伝える知識、情報といったものとはまた別種の興味を引き起こすものがある。それは、むしろテキスト自体、さらに厳密に言えば、両テキスト間のズレ、空白を(前述のチェイスの言葉を使えば)「楽しむ(enjoy)」という、ある種のゲーム性をはらんでくるのである。

### 「万能膏薬」と「カソーボン」

たとえば、ピアがここで切り取ってくる「万能膏薬」の広告、つまり、まやかし薬の効用を宣伝するテキストは、いわば読みの快樂の最たるものになるろう。

結論を少し先取りしていえば、ピアはここでは自らの読み取りを示すよりは、むしろ、読み手側を読み取り(のゲーム)に参加させることのほうを企んでいるようさえみえる。そして、そこでは広告のテキストは微妙にエリオット自身のテキストと関連し、交差してくるように思われる。

問題の広告文からみていこう。そこで読者が出くわすのは、当時の読者を惹きつけるべく持ち出された病名の、まさしくなりふり構わぬ列挙である。虚弱筋肉、神経症、気管支炎、坐骨神経痛、疼痛(性)チック、リウマチ、局所痛、肺炎、激しい咳込み、喘息、腰痛、下痢、そして衰弱(結核)——十指に余る病名が、おそらく思いつく限り挙げられるのだが、それでもまだその広告テキストの創案者は気が収まらなかったとみえる。さらに薬の効果のほども述べ立てるという徹底ぶりである。

He affirms that *headache* is cured by one worn just below the breast-bone; that one placed over the navel will cure hysterics, as well as dysentery and affections of bowels. Even *chronic constiveness* he found to be greatly relieved by wearing one over the bowels. (20)

塗布する体の部位はそれぞれ異なれ、一塗りするだけで、頭痛、ヒステリー、赤痢、腸疾患は全快、そして慢性の便秘でさえ一塗で大幅に改善、といった具合に誇大な保証がうたいあげられる。それは、ある意味ではいかにも人間的な、むしろ、もはや人間臭いといってもよいようなテキストになるのだが、ここで注目すべきは、まず読み取りゲームの口火を切るのがピア自身であるということだ。

Had Casaubon but known!—his chronic costiveness might have vanished. The absurd and total barrier between what is present in the text and what is beside the text sparks various thoughts of what could have been had the characters had access to the advertisements. (20)

「カソーボン」がこの広告さえ知っていたら、彼の持病など吹き飛ばしてしまっていただろう——ピアは突然『ミドルマーチ』の登場人物の名指しをする。この脇役、つまりエドワード・カソーボン

(Edward Casaubon)こそ、終生そして死後でさえも遺言という狡猾な手段を用いて、主人公ドロシア・ブルック (Dorothea Brooke) を苦悩に陥れる張本人である。もっとも、ニーナ・アウアバーク (Nina Auerbach) の論文などでは彼に同情的な面もうかがえなくもない。しかし、それはおそらく「書く者」同士のよしみともいってもよいものだろう。カソーボンは、彼の研究がいかにも時代錯誤的なものであれ、「あらゆる神話学への鍵」を追究し、その出版の〈準備〉に自分の生涯を賭して取り組む登場人物である。そしてアウアバークはおそらく自らを「書く者」として刻印している。この文学研究者が、彼を最真目でみるのはある程度納得がいく。だが、それは当然、彼の人間性に向けられたものではない。あくまでもカソーボンが彼女同様に書く人間でもある (かもしれない) からだ。それはカソーボンの労苦に対する一種の共感めいたものにたぶん起因している。それはそれで別の興味を起こさせもするが、読みとしては例外的なものであり、少なくとも一般読者に関していえば、この登場人物に共鳴できるような者は皆無だろう。

そういった嫌味な登場人物に対して、しかし、ピアの方法はいささか巧妙である。ピアは彼に見せかけの同情を示しながら、その実、紛れもない形で当人にこの病名を早々に刻印してしまう。「慢性便秘 (chronic costiveness)」と「カソーボン」——作者エリオットでさえ気づき知らぬ異様な結びつきではある。だが、ピアはこの二者を引き合わせてしまう。力技である。

通常言語による、世俗的、とまではいわぬにしても、日常性を濃厚に帯びたこの卑近な病名が、突如、『ミドルマーチ』という古典文学の世界に引き込まれる。あるいは逆に、広告テキストが古典文学の世界を引き寄せてくるといってもよい。だが、いずれにせよ、有無をいわず両テキストの境界を侵犯してしまうピアの強引さは否めない。

しかし実際のところ、その組み合わせはレトリックとしても言い得て妙なものとなる。広告テキストが仄めかす当時の一般通念では、「慢性便秘」は、たとえば赤痢よりも根治困難な厄介モノであるように読み取れるのだが、他方、カソーボンもまた『ミドルマーチ』の厄介者であることには相違ない。彼には、夫という資格で、死後もなおドロシアを抑圧、支配して苦悩させる鈍さと執念深さ、そして恨みがましきという〈持病〉がある。それはなるほど救いがたい人間性には違いないのだが、これもまた人間の性 (さが) であることには変りない。読者は暗澹たる思いを噛みしめながらも、創作上のそうした〈現実〉を受け入れざるを得ないのだ。しかし、ピアが混在させた広告テキストがそうした事態を一転させてくれる。なるほどカソーボンの腹部にこの万能薬を一塗するだけで、彼の身の内に鬱積してやまないわだかまりは一掃され、彼は長年の持病から解放されただろう。そして他方では、読者のほうも同様に解放される。読者の代弁者ともいえるピアのこの〈しっぺ返し〉によって、彼が元凶となっていた持病 (鬱憤) から解放されるのである。見事な結着というほかない。

ちなみに、当時の読者はこのような読み、つまり文学と広告という、両テキストの境界の揺らぎ、あるいはそれら二つの領域を行き来するような読みを実際に意識していたのだろうか。それはわからない。またさらに、ピアのこうした読みは、『ミドルマーチ』の核となっている峻厳な人生哲学の側面を信奉する読者には、古典文学への、あるいは作者エリオット自身に対する冒瀆、文字通りの「不遜」として映る恐れもあっただろう。だが同時に、少なくとも、エリオットの読者であるばかりではなく、現代の (さらにいえば 21 世紀の) ピアの論文の読者の中には、そうした組合せが腑に落ちる者がいるとしても不思議ではないだろう。

上記の引用に引き続き、ピアは両テキスト間に偶然、生じた皮肉な、しかし、また滑稽でもある齟齬の端的な例を紹介している。『急進主義者フィーリクス・ホルト』 (*Felix Holt, the Radical*, 1866) では、主人公フィーリクスは父親が一儲けを企んで作った偽薬を、父親の死後、自らの信念のもと、

母親の願いに背いてすべて破棄したのだが、そのわずか数年後、まさしくそうした種類の怪しげな薬が、同じ作家による『ミドルマーチ』では堂々と再登場することになる。この文学作品に挟み込まれた広告テキストでは、賑わしいほどにその薬効が喧伝されるからである。ピアは、まやかし薬をめぐるそうした齟齬に注目し、当時の読者反応を憶測して、それもまたカソーボンの場合と同様に、奇妙（curious）（30）であると感想を漏らしている。だが『ミドルマーチ』には、旧態依然とした医療制度に敢然として立ち向かい、新しい医療改革の大志を抱く青年医師ターティアス・リドゲイト（Tertius Lydgate）もいたのではないか。彼の場合、その志は挫折に終わったのだが、しかしこの登場人物の存在を思い起こすだけで、同じ一冊の本の中で、「偽薬」に対する否定と肯定という屹立した二項対立が併存するようになる。つまり広告と文学という二つのテキストは、互いの領域を跨ぎながら、「偽薬」を軸として対立することになるのだ。なるほど偶然とはいえ（否、おそらくむしろ偶然であるがゆえに、なおのこと）そこに産み出されてくる皮肉の効果は現代の読者にとって興味深い。

もっとも、現代の読みにおいて、そうした二項対立よりもさらに読者の好奇心をくすぐるものがあるとすれば、それはおそらく多義性といわれるものだろう。たとえば前述したカソーボンと〈持病〉との結びつきが引き起こす（かもしれない）多義性である。当然ながら、この多義性は、カソーボンにあるのではなく、また当然「慢性便秘」にあるのでもない。それは二者を強引に結びつける、まさにピアの企みにある。それにより読者はいっそう深く多岐にわたる読み取り行為に誘い込まれていくのである。

### 「咳止め薬」

ピアの読み取りがさらに生彩を帯び、いわば呼吸しはじめるように感じられるのは、端的にいってしまえば、彼女の時代検証、学識に裏付けられた証明であるよりは、むしろそれが読者との交歓ともいべき読みに切り替わるときのように思われる。その極め付けは「咳止め薬」の広告だろう。その重要性は、まず広告の位置にある。広告は本の最後に差し挟まれる。つまり、主人公であるドロシア・ブルックの問題含みな運命（惣谷「『説得』と『ミドルマーチ』」52-53）のあとを引き継ぐのがこのテキストなのだ。ピアの論文は、ここで『ミドルマーチ』の「終曲」の最終部を引用しているのだが、本論ではその個所を和訳して示せば以下のようなになる。

彼女【ドロシア】の繊細な精神は、広く目につくようなことはなかったものの、まだその素晴らしい種を宿していた。彼女の豊かなひととなりは、キュロス大王によって水を堰き止められた河のように、この地上ではほとんど名もなき、小さないくつもの流れとなっていた。しかし、彼女の存在が周囲の者に与える影響は数限りなく、あまねく広くゆき渡った。なぜなら、この世界の善が育っていくのは、ひとつには、歴史に刻まれることのない行為のおかげであるからだ。そして世の中がお互いにとって、思ったほど悪くないのは、これまで目立たない人生を誠実に送り、いまは訪れる人としてまばらな墓に眠る者たちに、なかば負っているところがあるからなのである。

（*Middlemarch* 785。拙訳）

物語のこうした終結のしかたは、読み取る側にあとあとまで余韻を残すものとなるのだが、もし、その読者が次に連なる広告文にそのまま読み進んだと仮定すればどうだろう。彼は、広告が孕む、即効性ある〈現実〉に有無をいわせず、丸投げされただろう。

ビアが挙げたその広告文は、「きわめて繊細な女性」や「ごく幼い子ども」にも飲みやすい薬だと、イタリックで強調されたうえで、次のように続く。

. . . the *Public Speaker and Professional Singer* will find them invaluable in allaying the hoarseness and irritation incidental to vocal exertion, and also a powerful auxiliary in the production of *Melodious Enunciation*. (20)

ビアはこの広告文に、『ミドルマーチ』の登場人物たちを連想する。なるほどビアが想像を逞しくするように、主人公ドロシアの美しい声をはじめとして、バルストロートの演説、そしてロザモンドの感じやすさ、それらを健やかに保つには、この咳止め薬は重宝であったに違いない。そしてここでビアはまた読者にまで想像を巡らせるのだが、そこでは8巻にも及んだエリオットのこの力作のまさしく長さ自体がユーモアを込めて皮肉られることになる。「もし、読者がこの小説を声に出して読んでいたとすれば、物語の終わりにきたときには、確かにこの薬が必要になっていたことだろう」(21)。

文学、広告の両テキストはビアによって混ぜ合わされる。なるほどビアはここでは読みを「楽しんで」いる。しかし、前述したチェイスの指摘のように「こうした読みは決して不真面目でも恭しくもない」のだ。むしろここで注目すべきは、ビアが持ち出した通常言語による広告文は、文学とは真正面から衝突するものの、興味深いことに両テキストは妙に呼応してしまうということだ。さらに厳密に言えば、呼応しているようにも読み取れる、ということである。

### “My God! And is that all?” と多義性

呼応が読者を刺激する。ここではビアは自らの自由な連想を披歴しながら、おそらく読み手側の想像力も解放しようとしている。読みのゲームへの参加を促しているといってもよい。そしてビアの狙い通り、ゲームはもうすではじまっている。そこでは、たとえば「咳止め薬」に関しては、読者の中にはビアとは別の考えかた(感じかた)をする者も出てくるかもしれない。ビアが想起する「読者」、つまり声を振り絞り、ようやく『ミドルマーチ』の最終回にまで辿り着いた、この律儀ともいべき読者は、確かに咳止め薬を必要とするほど惨憺な状況にあっただろうが、しかし、他方では、この物語の終焉にある深淵を覗き込んだまま、立ちつくす読者もいたはずである。“My God! And is that all?” (Carroll 30, 惣谷、「Miller」52)と、途方にくれる彼らにとってもまた、咳止め薬は切実に求められるものだったろう。彼らは、途切れ途切れに聞こえてくるようなエリオットの『ミドルマーチ』の語りの「声」に、歯がゆい思いで耳をそばだてながら、たとえば、この作者の<発声>がもう少し明瞭で聞き取りやすいものであったなら、と作者エリオット自身がこの咳止め薬を試してくれることをふと願ったかもしれない。広告文が刺激して読者に想起させるものは、各個人によって実にさまざまな方向性と拡がりをもっていく。そしてそれは『ミドルマーチ』の謎めいた終わりかた、つまり「終曲」が帯びる多義性、を読者に再び想起させるものにもなる。

ビアのこの論文のそもそもの目的は、前述のとおり、出版当時と現代の読者間の情報、意識の差を埋めることであり、読者は、ビアの「ない」という指摘によって、エリオットの作品中の「モノ・コト」の不在に気づかされる。のみならず、それらは不在であるがゆえにかえって前景化されてもくるのだ。

このように、ビアは当時の広告文の情報を並列しながら、時代の推移によって開けられた空白に、より多くを、そしてより深くを読み取ろうとしているのは確かである。だがこれまで本稿でみてきた

ように、実際のところ『ミドルマーチ』出版当時と現代、両読者間の時代的ズレ、空白を埋めようとするピアの行為は、興味深いことに、他方ではむしろ別種の空白を自ら産出してしまったのではないか。つまり、文学と広告の二つの異なったテキストの交差が伝えてくるある種の揺らぎ、それが帯びてくる読みの空白の産出である。さらにいえば、それはこの「終曲」における作者エリオット自身の故意の空白と無関係ではないようにも思われてくる。

エリオットの『ミドルマーチ』の最終部には、読者のあの“*And is that all?*”に代弁される、一種の肩透かしの感があり、それはおそらく作者の意図的なものであっただろうが、ここでピアが考えていた（あるいは、むしろ魅せられていた）のは、エリオットのそうした肩透かしが与える空白であったかもしれない。ピアは『ミドルマーチ』では、はじまりと終わりが、確固たる基盤と、逆にそれを揺るがすものによって成り立っていることを見て取っている。つまり、聖テレサの完全な秩序と統制がある一方で、他方では「排除」、「否定」、そして「不可能性」(28)が潜まされていることに気づかずにはいられない。ピアは安定と揺らぎの落差（と、さらにいうなら、それによって生じてくる空白）をしかと見届けている。

しかし、それよりいっそう興味深く思われるのは、そうした指摘のみならず、ピアが自身の書きものにおいてもエリオットと同様のことを試していることである。おそらくエリオットの場合同様、それもまたピアの意図であっただろう。この論者はエリオットの方法について語りながら、実際のところ自身の方法をも語っている。ここではピアは、エリオットが「作者と読者の間で揺れ動く力関係」(30)を意識しながら創作に取り組んでいたとしながら、エリオットの書簡を紹介している。

エリオットは、その書簡の中で「古典」である『イーリアス』について、ホメロス作とされるその長編叙事詩のいわば空白に注目している。詩には、どれが正しいのか誰にもわからぬ六通りもの異なった意味が含まれているのだが、エリオットが魅了されるのはその詩の「両義性、多義性」(“*equivocalness*”)自体である<sup>②</sup>。ピアは、エリオットのこの「多義性」を取り上げ、この作家自身も『ミドルマーチ』においては十分「そうした多義性を活用しており、読者にこれまで読んできたものを読み直し、再評価するように促している」(30)と結論づけている。ピアのこの結論は、ヒリス・ミラー(Hillis Miller)の「読みの(不)可能性(*the (im)possibility of reading*)」(Miller 154、惣谷「『説得』と『ミドルマーチ』」192)への注目、示唆にもつながるものだろうが、ピアが読み取ったエリオットのこうした創作法は、そのままピア自身のこの論文にもあてはまるのではないか。

エリオットは作家としての権威を確立することを拒否している——ピアはそう主張する。おそらく『ミドルマーチ』の終末における空白を主に念頭における主張だろうが、ピア自身も同様に、この書きもの(論文)において自分の権威を確立することを、なかば拒否している。ピアが書くのは、当然、文学作品ではなく論文ではあるのだが、書き手が著者としての権威を拒否するという点では両者は重なり合う。文学に広告テキストを強引に引き合わせ、そこに生じてくる揺れをそのまま読者に手渡すというピアのその試みは、まさにその最たるものではなかったろうか。

しかし、そうした方法は当然ながら、「不真面目」なものではないだろう。ここではチェイスの序の言葉が真実味を帯びてくる。最初に述べたように、「一世紀以上にわたり崇められ続けてきたこの小説」になにか唯一足りないものがあるとすれば、「不遜」こそ、それである、といった編者チェイスの鋭角的に切り取られた言葉が、ピアの論文に引き取られると、チェイスのその直裁さは、論者であるピア独自の的方法論の中に巧妙に、なかば隠蔽される。両者の方法論は異なる。しかし、ピアの場合もまたこの編者の言葉の直接性同様、不真面目さとは無縁である。それどころか、不真面目さなどはむしろ対極にある。それはまさに真剣勝負であるのだ。

エリオットが創作においては、書き手と読み手側の間で揺れ動く力関係を緊密に意識して執筆していたことをピアは見て取っていた、とはすでに述べたが、ピアはエリオットが「読み手自身の創意工夫 (reader's own ingenuity)」(30)にも着目していたことにも触れている。ピアの場合は創作ではなく論文であるとはいえ、この研究者にとってもまたエリオット同様、こうした書きものは、読み手自身の(読みにおける)創意工夫との真剣勝負であったに違いない。

これまでみてきたような広告併載は初版の8巻分冊が最初で最後の試みであり、その後、二度と現れることはなかったとされる。初版に突如、出現した広告文の「存在」の不意打ちは、作者のエリオット自身は当然のこと、生涯にわたり彼女のパートナーであり続けた G. H. ルイス (G. H. Lewes) にとってもいかに目障りで、はた迷惑なものであったろう。まして、エリオットは自分の文学テキストが広告文のテキストと交互に読み比べられ、読み手の側で、読みの〈往還〉、読み直しが起こることなどよもや想像しなかったはずである。論文において文学、広告の両テキストを併存させるというピアのこの斬新な方法は、論文の読者のみならず(もし、エリオットも読むと仮定すれば、の話だが)作者エリオットにとっても確かに意表を突くものではあったろうが、しかし、彼女のこの方法もまた、エリオットの場合同様、十分「多義性を活用しており、読者にこれまで読んできたものを読み直し、再評価するように促している」ことも確かなのだ。

ピアが看破したという、エリオットの意図(と思われるもの)は、ピアのこの論文の「モノ・コト」に萌芽があり、「エリオット」の読み直し、再評価はすでに読者の側で息づきはじめているかもしれない。ピアの議論は「21世紀的読み」の一つの試みであり、かつ真摯な提案でもある。この書きものは、現代の読者にとっては論文であり、かつ、それ自体が「21世紀的読み」の快樂にもつながる巧緻な読みものともなっているのである。

## Notes

(1) そうした「モノ」に対するピアの着眼は、同書におけるいま一人の論者にも通じるだろう。ケイト・フリント (Kate Flint) もまた『ミドルマーチ』のモノに注目しているが、物質性自体をテーマにした彼女の論文では、ピアが挙げていなかったモノ同様、ピアの挙げていたモノもさらに具体的に列挙されて、当時の人間の憧憬、欲望といった日常性がさらに現実味を帯びて現代の読者にも伝わり、当時の様相を探る手立てとなる。

その一部を紹介すれば、フリントは、当時の読者が出合う『ミドルマーチ』とは、まぜウィリアム・ブラックウッド・アンド・サンズ社発行のずっしりした8巻の並製の本であり、その緑がかった表紙をいったん開けば、読者は自分たちがモノに囲まれた存在であることを疑わなかっただろうと、その物質性を強調する。そして彼女の言葉を用いれば、『ミドルマーチ』は広告に挟まれた「サンドイッチ」状態にあるのだが、エリオットのテキストをサンドイッチ化している広告は、たとえば「新案煙草ケース」「蠟洩れなしの蠟燭」「化粧石鹸」「精選香水」、そしてなにやら新しい趣向を凝らした(らしい)「浴室付のホテル」(65)といった具合に、まさに「モノ」視点で読み取られている。当然ながらピアとフリントの議論はそれぞれ異なった展開をみせていくのだが、両論文の出発点がともに『ミドルマーチ』のモノへの注目であることは興味深い。



(2) ピアが看破するこうしたエリオットの「多義性」重視の傾向は、たとえば自作に併載する挿絵に対して、この作家が否定的であったことにも通じるだろう。マイケル・スティール (Michael Steele) は、エリオットが挿絵を回避しようとした理由として、挿絵画家たちの文学解釈が読者の作品受容に与える (かもしれない) 影響を、エリオットが危惧していたからではないかと憶測しているが、それが真実であるとすれば、こうしたことから文学解釈の孕む「多義性」を読者のために確保しておきたいという、エリオットの作家としての意図、信念のようなものが読み取れる。

### Works Cited

- Auerbach, Nina. "Dorothea's Lost Dog." Chase, pp. 87-105.
- Beer, Gillian. "What's Not in *Middlemarch*." Chase, pp. 15-35.
- Carroll, David. editor, *George Eliot: The Critical Heritage*. Routledge and Kegan Paul, 1971.
- Chase, Karen., editor, *Middlemarch in the Twenty-First Century*. Oxford UP, 2006.
- . Introduction. Chase, pp. 3-14.
- Eliot, George. *Middlemarch*. 1871-1872. Oxford UP, 2008.
- Flint, Kate. "The Materiality of *Middlemarch*." Chase, pp. 87-105.
- Miller, Hillis. "A Conclusion in Which Almost Nothing Is Concluded: *Middlemarch's* 'Finale'." Chase, pp.133-56.
- Steele, Michael. "'In the Abstract I Object to Illustrated Literature': George Eliot, Artists and Visualization." *The George Eliot Review*, vol.54, 2023, pp. 87-105.
- 惣谷美智子「『説得』と『ミドルマーチ』——はじまりと終わりの狭間で——」『オーステインとエリオット——深遠なる関係の〈謎〉を探る』惣谷美智子、新野緑編著、春風社、2023、pp. 159-197。
- . 「*Middlemarch*: J. Hillis Miller の〈読み〉を読む——A reading is a game, but it is a serious game.——」『言語文化研究』第7号、神戸海星女子学院大学 言語文化研究所、2023、pp. 39-58。